データで教育を読む
Benesse Report
第 2 回

子どもたちの「語彙力」を高めるヒントとは？

資質・能力の基盤として語彙力の育成を重視する方向性が文部科学省から示されています。「現代人の語彙に関する調査」からその指導のヒントを探ります。

※本調査では、対象の言葉のうち回答者が「知っている」と答えた割合をその人の「語彙力」としています。

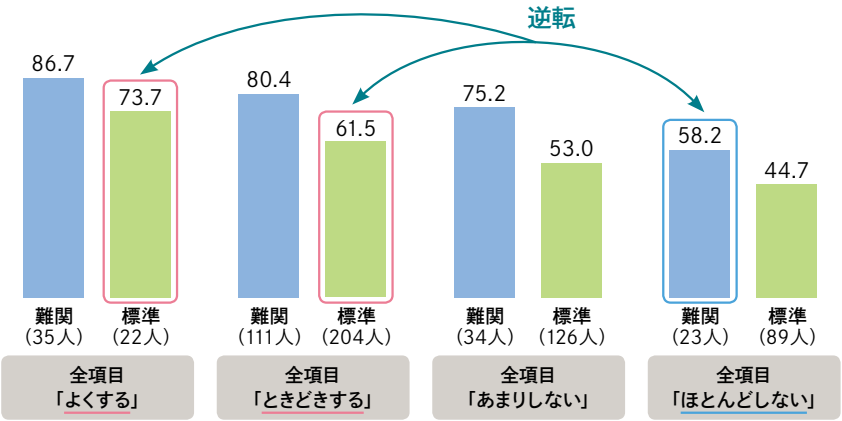
1 アクティブ・ラーニング*1は「語彙力」の育成に有効

図1 ［第2回調査より］アクティブ・ラーニングの経験別「語彙力」（高校生）（抜粋）

項目		語彙力（%）	差
どのように調べればよいかを考える	する（689人）	65.6	17.3
	しない（351人）	48.3	
観察・実験や調査などで考えを確かめる	する（409人）	68.9	15.1
	しない（631人）	53.9	
自分の関心にあった学習テーマを決める	する（509人）	66.7	13.6
	しない（531人）	53.1	
調べたことを文章にまとめる	する（559人）	66.0	13.4
	しない（481人）	52.6	
自分の考えを図表や写真などを使って表現する	する（389人）	68.1	13.2
	しない（651人）	54.8	
友だちの意見を聞いて自分の意見と似ている点や違っている点を考える	する（595人）	65.1	12.5
	しない（445人）	52.6	
グループで活動をふりかえって何がよかったか悪かったかを考える	する（501人）	66.0	12.0
	しない（539人）	54.0	
学習のまとめをみんなの前で発表する	する（496人）	65.8	11.5
	しない（544人）	54.3	

注1）質問「次のような授業での学習をどのくらい行っていますか。それぞれについて、あてはまるものを選んでください」について、各項目の回答「よくする」「ときどきする」を「する」、「あまりしない」「ほとんどしない」を「しない」として集計。
注2）数値は、小数第二位を四捨五入している（以下同）。

図2 ［第1回調査より］アクティブ・ラーニングの頻度別「語彙力」（高校生）（%）



注1）質問「次のような授業での学習をどのくらい行っていますか。それぞれについて、あてはまるものを選んでください」に対する項目「自分の考えや学習の成果をみんなの前で発表する／テーマについてグループで話し合う／調べたことを文章にまとめる」を1つにまとめ、「よくする」「ときどきする」「あまりしない」「ほとんどしない」と答えた各群の語彙力を、通学校のタイプ別に比較した。
注2）「難関」「標準」は、現在通っている学校について、回答者に選択してもらった結果による。

「語彙力」と行動・意識には関連性が

言語力は、情報を正しく理解し、自分の考えを分かりやすく伝えるために重要であり、すべての学習の基盤となる力だ。

本調査では、言語力の根幹となる「語彙力」と行動・意識の関連性を分析している。今回は、「語彙力」が高い高校生の特徴から、「語彙力」を高める指導のヒントを探っていく。

アクティブ・ラーニングの経験と「語彙力」

まず着目したのは、学習活動と「語彙力」の関連性だ。**図1**は、授業でのアクティブ・ラーニング（以下、ＡＬ）の経験による「語彙力」の違いを分析した結果である。

授業でＡＬの各活動をすると答えた高校生の方が「語彙力」が高いことが分かる。他者の考えを聞く、資料を調べるといったインプットと、自分の考えをまとめ、伝える・発表するといったアウトプットを、ＡＬの授業を通して日々繰り返すことが、「語彙力」を高めることにもつながっていると考えられる。

ＡＬの実施有無で「語彙力」の逆転も

さらに、学力によらず、ＡＬと「語彙力」が関連している可能性も見えている。

図2は、授業でのＡＬの頻度と「語彙力」の関係を、通学校別に分析した結果だ。ＡＬを「よくする」「ときどきする」と答えた「標準」校の高校生の方が、ＡＬを「ほとんどしない」と答えた「難関」校の高校生よりも「語彙力」が高いという結果が出た。ＡＬを実施している方が、学力にかかわらず「語彙力」が高いという結果は、ＡＬの「語彙力」育成の有効性を示すものと言えるだろう。

＊1 この調査では、アクティブ・ラーニングについて、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法に該当すると考えられるものを項目として抽出した。

出典 「現代人の語彙に関する調査」

「語彙・読解力検定」を主催するベネッセコーポレーションが、全国の高校生から社会人までの3,130人を対象に、2016年に第1回、2017年に第2回調査を実施（各回ともに調査時期は7月）。辞書語彙[*2]、新聞語彙[*3]から厳選した540語の「熟知度」[*4]を調べ、言語活動の実態、年代、生活、行動などによる「語彙力」の違いを明らかにすることで、現代人に必要な言葉の力を高める方法の検討を目的とする。

◎詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。
http://www.goi-dokkai.jp/research/index.html

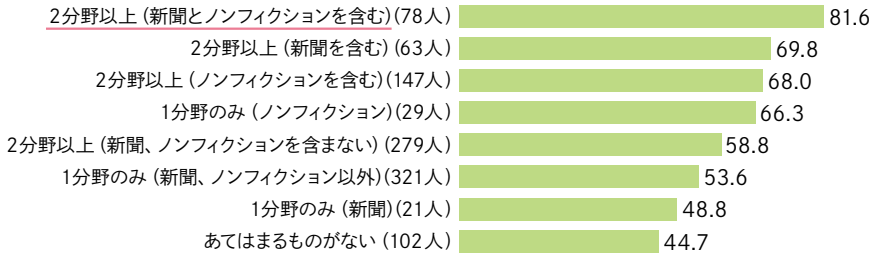
語彙・読解力 検定

「語彙・読解力検定」は、ベネッセコーポレーションと朝日新聞社が主催する、社会に必要な「ことばの力」を測る検定。2011年の開始以来、累計約33万人が受検している（2017年8月時点）。

ごいどっかい 検索

2 多様な分野の読書が「語彙力」を高める

図3 ［第1回調査より］**読書の種類別「語彙力」（高校生）**（%）



注） 質問「次のような本や文章を読みますか。読むことがあるものをすべて選んでください」／選択肢「フィクション（物語や小説など）」「ノンフィクション（新書、実用書など）」「マンガ」「新聞」「雑誌（マンガを除く）」「この中に読むことがあるものはない」。

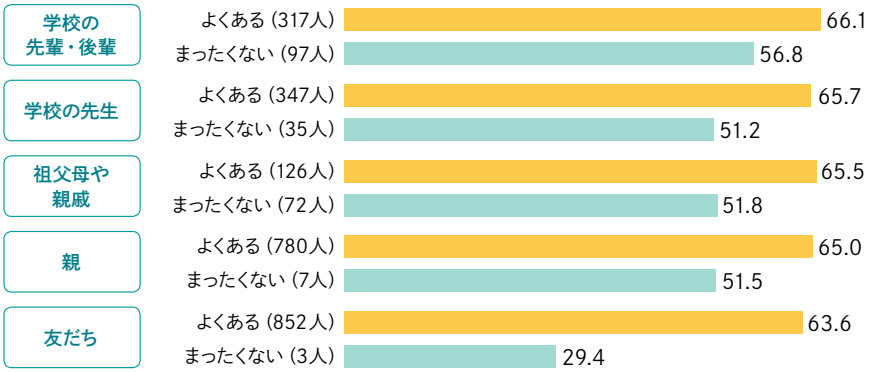
次に、読書と「語彙力」の関係を見ると、読書量が多い高校生の方が「語彙力」が高いという結果に加えて、多様な分野の本を読む高校生の方が「語彙力」が高いことが分かった。特に、新聞やノンフィクションを含む分野を読む方が、「語彙力」も高い（**図3**）。物語や小説だけでなく、新聞やノンフィクションなど幅広い分野の文章に親しむことが、多様な語彙を身につけるきっかけになると言えそうだ。

3 学校での長い作文や年長者との会話が「語彙力」につながる

図4 ［第1回調査より］**学校で長い文章を書く頻度別「語彙力」（高校生）**（%）

注） 質問「ふだん、次のような学習をどのくらい行っていますか。次のそれぞれについて、もっともあてはまるものを選んでください」に対しての項目「学校や職場で長い文章（手紙、作文、レポートなど）を書く」への回答。

図5 ［第1回調査より］**身近な人との会話の頻度別「語彙力」（高校生）**（%）



注） 質問「身近な人と話をする機会が、どのくらいありますか。あてはまるものをそれぞれ選んでください」についての選択肢「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」「いない」のうち、「よくある」「まったくない」のみを抽出。

さらに、書く、話すなどのアウトプットの機会も「語彙力」と関係があることが分かった。**図4**を見ると、学校で長い文章を書く頻度が高いほど、「語彙力」が高いことが分かる。「ほぼ毎日」書く場合と「しない」場合とでは、20.0ポイントもの差があった。

また、「話す」については、「学校の先生」、「祖父母や親戚」、「親」など、年齢差のある人との会話の頻度が高い方が、「語彙力」が高いという結果だった（**図5**）。

このように、「語彙力」が高い高校生の特徴を見ると、ＡＬや多様な分野の読書活動を取り入れるほかに、インプットした内容を話し合う、まとめて書く、異なる年齢や立場の人と話すといったアウトプットの機会を提供することが、「語彙力」を高めることにつながると考えられる。授業づくりや保護者への働きかけの参考にしたい。

＊2 主に国語辞典に掲載されている、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語彙。 ＊3 新聞に掲載されることの多い、社会生活で必要な基礎知識や時事知識に関する語彙。 ＊4 調査対象の各語について、「知っている」と回答した回答者の割合。